

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 139 号

平成25年11月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

石館守三「はまなすのこみち—私の歩んだ道—」より (1)

### 石館守三略歴

明治34年1月24日 青森市に生まれる。

大正7年3月 青森県立青森中学校卒業

大正11年3月 第二高等学校理学科卒業

大正11年4月東京大学医学部入学 (薬学科)

大正11年4月 同志会入寮、小西芳之助は、3年生。石館守三を、宣教師ミス・モークのバイブル・クラスと内村鑑三の聖書集會に導いた。

大正14年6月 東大聖書研究会発足し、参加。

大正14年3月 東京帝国大学医学部薬学科卒業。

昭和元年8月 倉田清・ヨシ長女光子と結婚

昭和9年5月 東京帝国大学助手

昭和11年3月 生薬植物化学研究のためドイツ(ベルリン、ハイデルベルグ、ウイーン)、チェコ(プラハ)へ留学。(2カ年)

昭和14年6月 東京大学助教授、医学部勤務。

昭和17年1月 東京帝国大学教授、医学部勤務、薬品分析化学講座担当。

昭和19年頃 プロミンに関する情報を入手、合成する。

昭和20年8月 ミス・モーク、石館邸に住む。(1年間)

昭和20年8月 小石川白山教会を自宅を持つ。(2年間)

昭和21年2月 同志会理事長に就任(昭和57年6月まで、36年間)

昭和 21 年 4 月 プロミンの試供品製作、多磨全生園の患者に投与。  
昭和 24 年 3 月 自宅敷地に高円寺東教会発足（小西芳之助牧師）  
昭和 33 年 4 月 東京大学初代薬学部長  
昭和 36 年 3 月 東京大学を定年退官、5 月 東京大学名誉教授  
昭和 37 年 3 月 社団法人キリスト教海外医療協力会初代会長（10 年）  
昭和 39 年 6 月 財団法人クリスチャンアカデミー理事長（21 年）  
昭和 40 年 12 月 厚生省国立衛生試験所長  
昭和 49 年 5 月 財団法人笹川記念保健協力財団理事長  
昭和 60 年 9 月 財団法人日中医学協会理事長、63 年 3 月会長（7 年）  
昭和 63 年 5 月 青森市名誉市民  
平成 8 年 7 月 18 日 逝去（享年 95 歳）

## 聖書と私

### 教えは聞くことから始まる

教えは聞くことから始まると言われています。教えは良き先生、良き書物からも聞くことができます。しかし聞いたことが身となり、肉となるには、それを受け入れる心の準備と求める心の態度があって、始めて成り立つであります。同じように良き先生、良き書物に出会っても、それを受け入れる方に準備がなければ、それは馬耳東風に終わります。

人は青年期にはいると、始めて周囲を見回し、人生に目覚める時期を迎えます。「人間とは何か」、「人間らしい人間とは何か」という素朴な疑問ではありますが、基本的な疑問がどこからともなくやってまいります。私もその声を青年時代に聞いたのであります。「人間らしい人間の道とはどんなものか」「お前は何のために学ぶのか」と。

18 歳から 20 歳の青年にこの問いに対する答えを求めても、所せん、無理であります。理解を絶したものであります。それで哲学書や宗教書にこれを求めても、そう簡単にこれを解決してくれません。唯、この問を大事に、何時かはわかるようにという気持でこれを持ち続けることが、将来の人生の道を選択する場合、大きな影響になると思います。

## 自分の辿った求道の道 ー同志会へ入寮ー

今自分の辿った求道の道を例として、話を進めてまいりましょう。

「人間らしい人間の最善の生き方とは、どんなものか」、その道をいつかは教えられるようにと願いつつ、私は旧制高等学校を終えて、東京の大学に学んだわけでありました。ここでは、私の専門は薬学でありましたので、自然科学の手法と法則は学びますが、人間の生き方には全く無関心であります。

私は偶然にも友人の紹介で、キリスト教主義の学生寮の小さな私塾である、本郷西片町に現在でもある同志会という寮に入りました。この寮は、17、8人の東大の各学部の学生の集まりでもありますが、小さな家庭寮で、1902年、今から70年前に創設されたものであります。この寮は、特別な規則と条件はない自治寮であります。綱領にはこううたっています。「我等はキリスト教の主義（信仰）に基づき、東京大学学生中、品性を修養し、知性を啓発して、キリスト教的人格を作らんとする同志をもって成り、この目的のために精高和楽なる家庭を組織するものなり」と。

この寮は、米国の聖公会関係の神学校に学んだ阪井徳太郎という先生が、明治35年、日本の社会に影響を与えている、また与えるであろうところの東京大学の学生に、知識と才能ではなく、キリスト教的精神と人格を与えることの重要性に思いをいたし、宗派を越えて、この学生塾を提供したことに始まります。私はここで3年の学生生活を送ることになりました。

## 同志会の三義務、内村鑑三先生、モーク先生

この同志会の学生塾は、自治寮であります。三つの義務が設定されております。一つは毎朝、15分位、食前にチャペルで讃美歌を歌い、聖書を読み、静かに静想すること。第二は日曜日は各所属する教会に出席すること、第三は毎金曜日の夕べ、食事を共にしながら、一堂に会して、感話と祈祷の会に出席することでありました。この三つの義務は、強制するものではないが、学生は求道者の集まりでありますので、必ずしもこれが厳格には守られたとは言えません。しかし無方針な放縦になれた田舎出の青年には一種の「行」となり、修業となっていたことは確かであります。

まだ祈る本当の対象、造り主を知らない私にとって苦痛でもありましたが、一日の始めに襟を正して黙想する時間をもつということは、一日の生活を清くすることに大いに役立ったと思いますし、聖書を読む機会を与えられたと思います。

毎日曜日には、友人たちが各教会に行きますが、自分も近所の小石川白山教会に通いまして、立派な宣教師のミス・モークのバイブルクラスに出る奇縁を得ましたし、また友人に誘われて、当時大手町会館で開講されていた内村鑑三先生の聖書の講話にも導かれました。毎金曜日の夕には、同志会の精神的指導者、または先輩の話を聞いて、キリスト教の実践の生活のあり方に触れる経験も得ましたし、もしも私が他の多くの学生と同じように、下宿生活をし、漠然とした集団生活をしていましたら、私の将来のあり方は大きく変わっていたであろうと今さら思えてなりません。この学生生活が大きな賜物となって影響を与えてくれました。

私はこの同志会の学生生活の中に、人生の方向と、私のその後の生き方を決定した要因があったと今でも思っています。その感恩の気持ちから、現在70年の歴史のあるこの同志会の理事長として、少しく奉仕しているわけであります。

## 真の理想的人間像

幸いにして学生時代に聖書を読むことを学び、先生方を通して聖書の教える宇宙観、人間観、社会観そして真の理想的人間像は、凡てキリストの中にあることの真実が漠然とながら自分を占拠するようになりました。今まで求めていたものが、これなるかなと知らされた気がいたしました。少しく自然科学を学び、自己の小さな理性に頼りがちで、しかも、物を疑うことに慣れている自分には、キリストが創造主である神の一人子であるという信仰を、そう簡単には受け入れられず、それにはなお時間を要したわけであります。

一生をかけて、命がけで説くところの内村鑑三先生のキリストの贖罪の教え、神との断絶の中にある人間の、神への和解としての、神の愛としての贖罪の教えに、また一方、か弱い身をもって福音のために一生を捧げている一人の宣教師の生活態度を見せられて、私の魂は強く動かされたのであります。

人間らしい人間の生き方は、正義を愛し、愛を持って自己の能力と情熱とを神と人ともに仕えることにあると知らされて、心の動揺も今迄の空虚さもやや満たされたような気が致しました。そして結婚と同時に、自分の学問の研究に精進する年月がしばらく続いたのであります。

## 汝の神はいずこにありや

しかしその間、キリスト教の信仰もこの世だけの自己中心の道德教に終わっていたような気がいたします。すなわちこの世の世俗的な外見的には善良なような、しかし利己的な人間の生活と同居して、ジグザグなよろめきの生活が続いたとってよいでしょう。その間、自己の「醜さ」と、人々の喜劇と悲劇を見、また人間の生と死を真のあたりにみせつけられた人類の一大悲劇である世界大戦を経験し、そこに内在する人間の罪、容赦なく生命が失われて、正義と人間の善意がじゅうりんされている現実を見てきました。「汝の神はいずこにありや」との間に、さらに強い信仰のゆさぶりを受けたわけであります。聖書はこれらに対していかに応えてくれるかを、改めて襟を正しく求めなくてはならなかったわけであります。

聖書の示す神の支配の下にある人間像は、今まで自分が画いていたものとは程遠く、自分のそれは虚像に過ぎないことを段々教えられました。聖書の教える人間像は、円満な人格や、表面善良な人間を意味しません。まして敬虔な宗教的教義や戒律を守る人間となることとは違うことを知らされたのであります。

真の人間像は、自己を投げ出してキリストに従うことにより、神との和解をいただいた者として、全く新しく生まれ変わることを要求されます。キリストの僕として、キリストが身をもって示したように、この世俗への奉仕者となることにあります。自己中心の生き方が打ち砕かれて、神の子キリストを中心とした生き方に、180度転換することを要求されます。

## 「我は道なり、真理なり、命なり」

今ここでキリストは、根源である神の与え給うた神の一人子であるという信仰の根拠、あるいは私の解釈を述べることは省略させていただきますが、ただ一言、キリストの言行を襟を正し、謙虚に学ぶとき、キリストは人の子であって神の子であるとの実感が迫って参ります。これが多くの証人によって証され、復活の主であることも、自然科学を学んできた私にも信ずることが不可能ではなくなりました。そしてこれが真実であることがだんだんわかってまいりました。

旧約聖書は神の支配下にある人類の歴史と、その運命を具体的にわれわれに示した歴史でありましょう。一方新約聖書は、キリストを人の子として人類の歴史の上に与え、神の側からの愛によって人間であるが故に差しのべられる神の救いの道を示した福音であることであります。もしそうであるならば、真の人間らしい人間の道とは、そして唯一の道は、キリストに従うことに尽きることになります。

ヨハネ伝第14章6節にあります、「われは道なり、真理なり、命なり」とキリストが断言したことは、真実であり、この真実をアーメンと受けとることがだんだんとできるようになりました。ここでヨハネが言うキリストは道なりという道は、沢山ある道の一つではなく、唯一の道であります。The Way でありまして、a Way ではありません。またわれは真理なりとは、沢山ある真理の中の一つではありません。決定的な真理であるとの意味であります。命も唯一の永遠の生命であります。これは生物学で言う動物的な生命ではありませんし、また科学的、進化論的な意味の命でもありません。人間だけに与えられる霊的生命であります。こう解釈すべきでしょう。

## 才能も財産も家族も、神かららの委託を受けたもの

真のキリスト者の人間像は、キリストと共に生きること、一旦は死んで、死なない生命をいただく者であります。したがってこの世俗も神のものであり、神の支配下にあるからして、キリスト者はやはりこの世において神のために奉仕することが要求されることも当然のこととなります。

そしてキリストの僕であるというキリスト者の具体的な生き方は、キリストの僕としてこの世の凡ての奉仕者となること、またこの世と生命はすべて神のものであるがゆえにキリスト者はこれを神からの委託として、それを神に捧げるということとなります。人類の生んだ政治も文化も教育も、また自分に与えられた一時の才能も財産も家族も、神からの委託を受けたものであるという考え方にならざるを得ないのであります。自分の所有物ではない。従ってそれを神の栄光と目的に捧げる義務があるということになります。キリスト者は、一度は罪のゆえにキリストと共に死んで、生まれながらの自己は死に、新しい人生の意義と目標を与えられて、再び生まれたものであると聖書ははっきり教えております。すなわちキリストにある者は、凡て新しく生まれたものであるとはこの意味であります。

この世の所有物は、神から委任されたものであるとの前提がなくして、人間の努力によって築かれたこの世の文化も科学も正しく理解することはできません。もしこの基本を軽視し、これを人間の欲望のままに放任すると、この世のすべての人間のなすわざというものは、混乱に落ち入らざるをえないであります。人間の歴史の救い難い不幸と禍の元もここにありましよう。この世の進路が自らの道を辿っている限り、科学も文明も亡びの道を辿らざるを得ないと聖書は断言しています。その証拠は我々の前に毎日明らかにされていると言えましよう。



## 愛こそが、凡てを完成し、我々の人生の業を完成させる

生まれながらの自的欲望と思惟から生まれたものは、たとえそれが表面上の善意であれ、人間の英知の結果であれ、その文明は混乱に落ち入る運命を負っております。真の平和と幸福は人間の生まれながらの欲望からは、あるいは思惟からは生まれてこないことを聖書は宣言しております。この予言は、歴史家の洞察を待つまでもなく、少しく歴史をひもとき、正視するならば、人間のあらゆる英知によって世の中が幸福になるという進化論的構想は、気休めの虚構であるということがわかるのであります。人間が新しくつくり変えられず、すなわち基本的な価値の転換なくして、人間の歴史が精神の完成や道徳の完成に向かって進んでいるという仮説は、何の根拠もない妄想にすぎないでありましょう。また何の慰めもない歴史観でありましょう。キリストはすでに「我にならえ」と教えて、その方法をすでに完成し、これに多くの証人を与えて我々に道を示しております。自分に敵する罪びとのために、自らの命を与え、愛を完成いたしました。人がこれにならうとき、何人もこれ以上のことをなし得ないことがうなずけるでありましょう。この愛こそが、凡てを完成し、われわれの人生の業を完成させる根拠であることを聖書が教えてくれるのであります。

## 復活の望と約束

聖書はさらに我々の想像に絶する福音の真実を提供していることがわかって参ります。私もまた人生の後半において学んだものであります。すなわち真の人間像とは、この世で神の奉仕者としての役割を果たすことに終ることではない。もし50年、80年の人生が、死と共に終りを告げるならば、それは一片の人生劇でしかないでありましょう。キリスト教がキリスト教であるゆえんは、キリストが死を克服して、罪の結果である死に打ち勝って、新たな生命を着た復活体として我々の前に立ち給うたという事実を信ずることでもあります。

キリストにならってこれに従うものは、罪のこの身も復活の望と約束が与えられていることでもあります。この信仰の与えられることは、万人に開かれた最高の人間像であるといえると思います。この信仰の確信と希望があつて、人々はこの世の短い人生の劇場で、各々その役割を担い果たし、最善を尽くす喜びと力が与えられると思います。かかる人こそ真にこの世の中に奉仕ができ、本当の福祉に貢献できる人ではありますまいか。神から与えられる永遠の生命の希望なくしては、この世は灰色の世界であります。朝日にあたってやがては消える薄氷の上の舞踏に過ぎない人生であります。それは滅ぶべきバベルの塔を築くに等しい人間の努力となりますまいか。

私は他の宗教の教えの本質を充分学ぶ機会を持ちませんでした。恐らく仏教もイスラム教も、この生と死の問題と死後の生命を教えてくださいることと思います。

私はキリスト教の世界観、神のこの世の支配、キリストをとおして人間に賜った限りない恩寵に出会って、またそれを教えられて、それ以外のものを求める必要もなくなったわけであります。唯この恩寵にすがり、その馳場を走り抜きたく願うのみであります。すでにこれを得たというのでなく、それを得ようとして努力するのが、一生であります。そしてキリストの忠実な僕となることを願うものであります。

## 復活がキリスト教の基本的な土台

一週間後の22日の日曜日には、キリストの復活を記念するイースターを迎えます。日本人は世界の人々並びにクリスマスを祝うことは知っておりますが、イースターの意味はよく知られておりません。キリスト者といえども、イースターの意味を軽視する人が多いようであります。復活がキリスト教の基本的な土台であり、これなくしてキリスト教が、生きた宗教となることはないことをもう一度学ぶ必要があると思います。

最後に一言つけ加えさせて頂きたいのですが、春この頃、私の庭にも鶯が訪れて参ります。鶯の声を聞きながら、娘が持ってきてくれた、読み人知らずとある歌の一句を思わず口ずさみました。

鶯の声なかりせば

雪とけぬ山里

いかで春を知らまじ

すなわち、鶯の声とは福音をのべ伝える声であります。もしもこれがないならば、煩悩にがんじがらめになっている我々の生活が、本当に希望に満ちた春の日の訪れるのを知らないでありましょう、と私は解釈したのであります。

私は若い日に、良き先生、良い友に出会ってこの福音を伝える鶯の声を聞くことができましたことを、私の人生にとって最大の感謝であると今でも思っているわけであります。

(NHK、昭和48年4月15日、宗教の時間の放送要旨より)

〔附〕 1986 年復活祭の日記から

この世は、一見、不公平と不幸が普く。  
幸福もまた、にせの幸福に満たされている。  
人の世は神の支配し給うものならば、  
人の一生はこのまま滅びるドラマで終るだろうか。

人は罪の中に生まれ、罪の中に生きる。  
故にその終わりは死である。  
人の世に罪なき人が存在したろうか。  
キリストのほかに、私はそれを知らない。

神よりのただ独りの人の子が、世の罪を負うて十字架の上に一度は死し、  
復活して永遠の生命の道を示した。これを信じる者に与えんと。

人生の真の幸福は、この希望と信仰に励まされつつ生きる者に与えられる。  
狭き門なれど、萬人に開かれた完成の道、既に与えられている。感謝。